

ベケット、放浪の魂

堀 田 敏 幸

一、探偵モラン

旅に出ることは、それまでの日常世界から切り離された世界へとおもむくことである。しかし、その旅の目的が定まっていないとき、人は自分の住居から最初の一步を踏み出した途端に停止を求められる。道路に立った瞬間、右へ行くべきか左へ行くべきか、判断を下さなければならない。目的地がないのだから、どちらの方角でも同じことだと考えるものの、しかしながら、どこかへ行く以上、一方を選択する必要に迫られる。ベケットの小説の主人公ワットなら、このように行動する。彼はノット氏のもとで召使いとしてしばらくの期間働いたあと、その職を辞して、最寄りの駅から汽車に乗ることになった。彼はノット邸では住み込みで雇われていたので、そこを離れるとなると帰るべき住居はない。しかも、これから住もうと思う場所も決めていない。そうした彼が駅にやって来て、彼の乗るべき汽車はどちらの方角へ行くものにすべきか、決定に困惑を覚える。彼は降車駅を駅員に聞かれて、まず最初に「この線の終点までです」と答えたものの、どちら行きの線なのか更に問われて、「近い方の終点」と返事したが、すぐに「遠い方の終点¹⁾」へと変更した。

ワットにとって近い終点であろうと遠い終点であろうと、どちらでも構わないことになる。なぜなら、彼は職を辞したあと、次にやるべき仕事の当てがある訳でもなく、帰るべき家がある訳でもないのだから、彼が向かう先は汽車に乗っている間に、これらの生活上のことをゆっくり考えられる所であれば良いのである。またこう言うことも許されよう、汽車に乗っている間、生活のことを何も考えないで過ごせる時間が多く取れる所へ向かうべきであると。それだから、彼は「遠い方の終点」を選んだのだし、汽車の中は恐らくワットが他人に邪魔されるこ

となく、一人でくつろぐことの出来る座席を提供してくれることであろう。実のところ、ワットはもともと浮浪者であって、ノット邸で働く以前にも自分の住居を持たなかった。彼がノット邸の仕事に向かうために汽車に乗ろうとした時には、彼の姿を見かけた通行人がうわさ話の中で、彼の夜に泊まる場所は「どこかのベンチ」であって、公園やサッカー競技場、テニスコートといった所ではないかと言いつけていたのである。

浮浪者は労働を軽蔑し、人間関係を嫌い、自由気ままな一人暮らしに憧れるために放浪の旅を選ぶのか、それとも仕事に失敗し、人間関係に疲れ、定住するだけの資産を持たないために放浪の生活に甘んじるのか。それはどちらの場合も有り得るであろうが、ベケットが小説に描いた主要人物であるマーフィーやワットの場合は前者に属する。マーフィーは労働について、恋人のセリアに言う。

次の週のためのお金も、ごまかせるような家計簿もなくなったとき、セリアは次の二つのうちのどちらかしかないと言った。すなわち、マーフィーが仕事を見つけるか、彼女が自分の仕事に戻るか。マーフィーは働くことが二人共にとって、致命的になるだろうと答えた。²⁾

マーフィーは、働くことが恋人との愛情を破壊すると主張する。なぜ労働が愛情にとって障害となるのか、マーフィーはセリアに正しく説明することが出来ない。彼は愛情が無償の行為であって、労働という金銭目当ての世俗行為に相応しくないと考えている。しかしながら、男と女が共同生活を送る以上、衣、食、住の最低限の物資が必要となることは、セリアならずとも誰もが疑うことのない条件である。それをマーフィーは拒絶し、愛情生活を無収入の上に作り上げようとする。彼がどうやって糊口をしのぐかと言えば、慈善のお金に頼ることしか他に方法は見つからない。この少額にしかならないであろう収入でもって、二人が共同生活することは不可能に近い。マーフィー一人でなら、どんなぼろ服を着、どんな粗食に甘んじ、どんな野外に寝泊まりしようと、平然と生活することが出来る。しかし、二人でとなると、生活の侘しさが人の意志を打ちのめすであろう。一人でなら自分の意志で赤貧に耐えられたものが、二人となるとその強かったはずの意志にも隔たりが生じ、愛情のひび割れが生まれることになる。マーフィーは結局セリアと別れ、精神病院の雑役係として住み込みで働くことを選ぶのだった。

マーフィーは労働を忌避し、一人暮らしの自由を信条とする人物であった。一人であるなら、住居を持たない放浪の生活も成り立つであろう。ところが、二人の生活となり愛情が係わってくるとなると、放浪生活はうまく機能しない。これが愛情関係のない二人連れであるな

ら、それも可能であろう。ベケットの戯曲作品『ゴドーを待ちながら』では、エストラゴンとウラジミールの男性二人組が、何十年来の仲間として放浪生活を送っている。彼らは行動を共にしているが、全面的な共同生活という程ではなくて、昼間に会って会話を楽しむけれども、夜になって就寝となると別々の場所に宿泊を取ろうとする。彼らにとって同じ場所で二人して過ごすという状態は絶対的な約束ではなくして、二人の気の向いた時に会えば良いという程度の軽い結びつきを前提としている。だから、一方が毎晩、宿泊場所を変えようと、また何日間か出会うことがなかりと、二人の関係に不和が生じることはない。また片方が食事にも事欠くような窮乏生活であろうと、もう一人はそれに対し援助を行うというような義務感を持つ必要はない。二人は気の向いた時に会い、気詰まりになった時に一人の生活に戻る。この鉄則が二人の放浪生活を、一人暮らしと変わらない程度に支えている。

放浪生活、これは現代人なら誰もが憧憬を持ちながら、容易には実行できないものとして存在している。勿論、現実に放浪生活がない訳ではないことは明らかだ。多大な負債を背負ってホームレスの生活に入るというのは、よく聞く話である。ただし、こういう自宅を失った生活者も何らかの仕事を見つけ、多くは一定の場所に住み着いているので、放浪者と言えるかどうか疑問符は付くが、一応その部類には入るであろう。経済的な事情がある人は兎も角として、本来的に仕事を嫌い、人間関係を負担に思い、一人暮らしの気ままさを良しとして実行できる人は少なからう。

ベケットの小説『モロイ』（一九五一年）は、奇妙な放浪の旅を描いている。これは『マーフィー』、『ワット』に続く作品として書かれたものであり、『ゴドーを待ちながら』の前年の創作に当たることから、テーマ的にも同じ放浪生活が取り上げられている。『モロイ』の内容は、探偵のジャック・モランが調査機関からモロイという人物の捜査をするように要請されると、彼は十代前半の息子を連れて出張に出る。しかし、途中で息子に自転車を買ってやると、彼は父親から離反してどこかへ去ってしまう。その後モランは一人徒歩でモロイの居るという町まで捜査に行くが、うまくモロイを見つけ出すことは出来ず、冬の聞き迷ったあげくにやっと自宅に帰り着くという話で、これは後半の第二部に語られる。そして第一部では、両足を痛め松葉杖に頼らないと歩けず、自分の名前も忘れてしまう程の健忘症に陥ったモロイが、年若い彼の母親に会いに来て、その家で何か物語を書こうとする話が展開される。物語の順序として、モロイを捜査するモランの行動があって、その後に見つからなかったモロイの生活が来るわけだから、一部のモロイが後で、二部のモランが先に描かれるべきではあろう。

物語の第二部に描かれるモランは、探偵らしく几帳面な性格である。「私は体系的な精神の持ち主で、外へ出る最良の方法を十分に考えないでは、任務を始めることは決してなかった³⁾」と彼は言う。探偵たる者は事件の捜査に当たって、その時々の場合当たりの方法でやっていた

のでは、迅速に解決へ持っていくことは出来ない。前もって見当を付け、証拠を集めるのである。だから、モランの思考方法が「体系的」であることは、探偵として当然の資質であると言えよう。「前もってどこへ行くかを、また少なくとも如何なる目的に向かって進むかを知らないでは、どういう方法で出発するか、どうして決められようか³⁾」。モランが出張方法を検討することに対し、二十一世紀に生きる者には分かりにくいかもしれない。現代では交通網は発達しているし、また電車やバスのない所ならタクシーで行けるし、車も誰もが運転できる。しかし、ベケットの小説の舞台背景となっている一九四〇年代、五〇年代というのは、まだ四輪の自動車が一般的でなく、汽車、モーターバイク、自転車、そして徒歩での交通手段となる。モランはモーターバイクで捜査に行くのが好みだと言うが、しかしこの二輪車であっても他人に容易に気付かれてしまうために、注意する必要があると言う。

結局のところ、モランはどの手段で捜査に出かけたのか。驚くなかれ。それは徒歩によってである。歩いて数分の距離であるなら、徒歩も考えられる。しかし、何日も歩き続けるような遠方に行くのに、この手段ではとても迅速な捜査は不可能であろうと、現代人なら思う。多少エンジン音が大きすぎようと、どうしてモーターバイクを使用しないのか。最低限、自転車は必要と考えられる。それなのに、モロイが取った手段は徒歩である。時代錯誤の感がしないでもないが、一九〇六年生まれの小説家ベケットが選んだ交通手段は、自分の足によって移動する方法であった。

徒歩での行程、これは放浪の精神を持つ者には絶対的に必要となるものであろう。なぜなら、ある目的地が存在するとして、そこへ一日で着いてしまうとしたら、どこに余裕のある思索の時間が生まれるであろうか。車を高速で飛ばしていく時に人が考えることは、まず規定の時間通りに目的地に到着できるかであり、道路を間違えずに行けるかである。こうした時間に拘束された精神であれば、目的の任務を遂行することは出来る。しかしそれだけでは、収入のための仕事を果たしたに過ぎない。仕事の成果を上げることは、労働する者にとっては確かに第一に要求される条件である。しかしながら、労働によって失われるものがある。それは人間の生きる喜びであり、生きることの意義であり、そしてマーフィーが述べたような愛情である。労働は生活するための金銭をもたらすが、人間の欲望は人を富の奴隷へと変える。人は管理され、自由の精神を失うであろう。それだから、車に象徴される時間の拘束性を、人間世界から排除しなければならない。ベケットは小説の中で、モーターバイクを使用することも十分に可能であったろう。しかし、彼は車の持つ時間の迅速性と管理体制を放棄して、人間に原始の自由な生き方を要求した。

モランがモーターバイクや車を使用しなかったのは、勿論、歩行の自由を重んじたのではないことは確かである。その方法がモロイ捜査には適していると、彼が判断したことによる。こ

の捜査にはどうも可成りの秘密性があるらしい。その証拠として、この捜査になぜモランの十三、四歳の息子ジャックまでもが動員されたのだろうか。ジャックの動員はこの捜査命令を出した調査機関によって発令されたもので、モラン親子の考えから起こったものではない。なぜある人物の身元捜査をするのに、探偵の他にその息子まで同伴させるのだろうか。それは対象のモロイに、これが捜査であることを気付かれないようにする為であろう。親子の二人連れであれば、相手はこれがピクニックか、または町の知人でも訪ねてきたのだろうと判断するから、捜査目的をカムフラージュできる訳である。それにしても、なぜそれ程にまで慎重にする必要があるのかは、小説『モロイ』を読む限り分からないし、しかも少年ジャックは途中で逃げ出して居なくなってしまう。とにかく、この捜査は秘密を要求するものではあるらしい。「我々は秘密の道を通って、何日間か歩き続けた。私は大通りに姿を現したくなかった⁴⁾」と言う。歩行は秘密の存在モロイを捜査するのに、まるで江戸時代の忍者であるかのような忍びの術なのであろう。

探偵モランは歩行による原始的な方法で、モロイを探し出せたのであろうか。それは困難であったと言う他ない。彼はかつてモロイを見かけたと言うが、それも捜査以前のことで、今となっては曖昧であり、調査機関からも詳しい情報を得ていないのである。ついに彼は、こんな風にも思うようになる。

私には仕事仲間がいなかったから、どんな事情で彼の存在を知ったのか分からなかった。もしかしたら、私が作り出したのかもしれない、つまり私の頭の中ですっかり作り上げられたものを、見つけたということなのかもしれない。⁵⁾

モランはモロイという存在に対して、自分の空想で作りに出したのではないかと思う。何しろモロイの写真を持っている訳でもなければ、彼の詳しい身体的特徴を知らされている訳でもなかった。明らかなのは、モロイの住んでいる所がバリーという村だということだけだった。このわずかな情報を元に、モランはモロイを探し当てなければならない。一体モロイなる人物は、探偵モランが誰か他人に一切知られることなく、秘密のうちに近づかなければならない程の存在であるのか。このことはモラン自身にもよく分からない。「私ははっきり言って、何を探していたのだろうか⁶⁾」。目的のモロイが見つからぬ以上、しかもその外見さえよく知らぬ以上、モランが捜査しようとする対象は疑心暗鬼に陥っていく他あるまい。

モランは何の為にモロイを探し続けるのか。勿論、それは彼が探偵であって、依頼された業務を遂行する為である。しかし、捜査対象が見つからないとなれば、彼は追跡を断念して、依頼主に現状を報告するまでであろう。ところが、彼の任務は途中で放棄されることなく、予定

よりも大幅に延期されることとなった。

私は八月に戻るように命令を受けていた、遅くとも九月には。家に帰り着いたのは春だった。これ以上、正確には言えない。だから、冬の間中、歩いていただけだ。⁷⁾

モランは雪の中を歩いていた。その間に食べたものと言えば、家から持参した缶詰などは無くなっていたし、レストランでテーブルに着くこともなかったのだから、野原の木の実や苔、川の魚ということになる。それ程にまでして、彼はなぜモロイの捜査を続けたのか。徒歩での行動であったので彼は膝を痛め、容易に帰路に着くことが出来なかったのか。モランはとにかく冬の間中、飢えをしのぎ、厳寒に耐え、肉体の苦痛に鞭打って歩き続けたのである。

二、放浪者モロイ

モランはもはや探偵ではなく、一人の放浪者である。彼が連絡係のガベルと出会い捜査中止の命令を受け取ったとき、なぜ彼はガベルと一緒に帰ることが出来なかったのか。捜査という目的を失ってしまった以上、彼の帰路は放浪の旅路以外のもではなくなる。所持金も持たず、従って食料も宿もなく、そして向かうべき方角も定かでないモランは、彼が息子に教えようとした言葉、つまり「なしで済ませろ⁸⁾」を自ら実践する羽目に陥ったのだ。なしで済ませる、これは放浪者が絶えず自分に言い聞かせなければならない教訓であろう。彼は何ものも所有せず、我が身一つで現世に生きていかねばならない。なぜ、そのような苦難を受けるのか。それは止むを得ず彼に降りかかってきた境遇であるのか、それとも自ら望むところがあったの行為なのか。その両方が入り混じっているのであろうが、一旦始まってしまった放浪の道は、そう安易に逃げ出せるものではない。この道に入った以上、自らの意志と放浪の精神をうまく寄り添わせていくしかない。モランはなしで済ますことの出来ない食物を何とか原野の中に見つけ出しては、命をつないで生き延びる。

モランがモロイを見つけ、実際にこの人物を捜査することは叶わなかった。しかし、そのモロイはベケットの小説の中では、モランよりも先に登場することになる。モロイは両足を痛めて、松葉杖に頼らないと歩行もままならぬ状態で、母親に会いに行く。自分の名前も忘れる程の記憶喪失に陥っているが、それでも自分の生き様を物語に書こうと願っている。彼は一体、どんな人生を送ったというのであろうか。その中では探偵モランが捜査する必要があるような悪事が、暴露されるのであろうか。恐らくモロイが語りうることは、自分が誰であるのかを忘れてしまったように、取り留めもない放浪の記憶であるのだろう。彼は、「自分が何であるか

も、存在していることさえも忘れることがあった⁹⁾」と言う。自分の存在を忘れるとは何かの拍子に安心して、意識を失ってしまうような状態を指しているのだろうか。そういう場合もあるかもしれないが、モロイにおいて病的な理由からそういった事態が発生したとは、むしろ考えづらい。なぜなら、彼が名前を忘れ、何者であるかを忘れ、どこに居るのかも忘れるとしても、彼の思考能力はむしろ健全であると判断すべきだろう。

それに、私はそこへ何をしにやって来たのだろうか？ 知ろうとしているのは、そのことなんだ。もっとも、こうした事はあまりまともに考えないようにしよう。恐らく自然の中にはあらゆるものがあるし、神の戯れも多いだろうから。それに多分、私はいろいろな違った状況や時間を、根底においては混同しているのだろう。この根底こそ、私の生息地なのだ、[…]¹⁰⁾

モロイは明言する、「状況や時間を混同している」と。彼がどのようにして母親のいる部屋へとやって来たのか、その目的は何であったのか、それは明確には明かされない。彼は探偵モランが探していたバリーの村に住んでいたのだろうか。それはいつの時期だったのだろうか。すべてが混乱していて、彼にそれらを確実に思い出すだけの判断力はない。しかし、モロイはそうした混同に対して自分の精神を疑ってはいないし、むしろそれらを肯定的に捉えようとしている。すなわち、状況や時間を混同させるような彼の精神的基盤こそが、彼にとっては望ましい「生息地」になり得ると確信している。なぜ彼は一般的人間が抛り所にしていく過去の行動事実や時間軸を破壊して、平然としておられるのだろうか。彼は人間社会において、他者との共同生活を行う必要はないのだろうか。彼が住むためには、部屋を借りなければならない。食物を得るためには、それを買い取るだけの金銭を用意しなければならない。つまりは、人間誰もがしているように労働に身を捧げて、社会の規範に従わなければならないのである。そうしたことを無視して、彼の生存が成り立つであろうか。

モロイは生命体にとって一番重要な食物の摂取に対して、人間の常識を苦もなくくつがえしてしまうだろう。彼の食欲は小鳥ほどの分量を食べれば十分であるし、飲み物もビールを五、六本一気に飲み込んだあと、一週間は何も飲まないでも平気であった。彼は人間の食べるものは極力控えて、何の栄養にもならない小石を好むと言う。「丸くてつるつるした小石を口にすると、気持ちがなごみ、すっきりして、飢えをおさえ、乾きを忘れさせるのだ¹¹⁾」。何と放浪者に向いている嗜好だろうか。彼は人間の慣習から逸脱した状況においても、十分に生存していけるのである。食べないこと、少なくとも空腹には耐えられること、これは放浪者にとって必要不可欠な要素であろう。なぜなら、大地をさまよう者は、単にこの地上をうろついているだ

けではない。彼は働くことを拒否しているのだ。働かざる者に収入はなく、食べる資格はない。どのようにして食料を得るのか。それはマーフィーが行ったように他人からの喜捨^{きしよ}を仰ぐか、自然界に自生している木の実などの植物や川魚を手に入れることになる。モロイは飲食を生活の不可欠な要素と考えていないのである。

「状況や時間を混同している」、これは時に誰しもが経験するに違いない。しかし、それは何かの異常事態が生じて、精神が動揺している時の一時的な現象に終わるであろう。モロイの場合はどうか。一時的な作用どころか、彼はこの事態を思考基盤の「根底」と捉え、彼が物事を判断する際の「生息地」と見なしている。つまり、モロイにとっては、状況や時間が普通の人間とは違う原理によって作動している。彼は何の目的で母親の所へやって来たのか分からないと言うし、どのようにして移動してきたのかも定かでない。自分の名前さえ記憶から容易に呼び起こすことが出来ない。彼はもう何年もの間、名前を他人から呼ばれたことがないのか。それ以上に、そもそも他人と深く接触したことがないのか。行きずり程度になら、人と出会うこともあったであろう。しかし、相手の心情を察するような会話を、交わした経験がないのかもしれない。彼は人間であることの社会性を忘却している。社会性を喪失した人間に、一般的人間が規範としているような生活慣習や時間通りの行動を順守させることは、困難を要する。しかし、モロイは敢然と言い放つだろう、社会慣習から遠ざかった思考基盤こそが、彼の「根底」であり「生息地」であると。

放浪者は社会的規則や時間を放棄した世界に生きている。その典型はモロイの歩行方法である。彼は両足が悪くて、松葉杖を用いないと歩くことも自由にならない。彼の足の障害は恐らく、探偵モランがモロイ捜査を断念して帰路にあるとき、長期間歩きすぎた酷使に起因しているのである。モランが自宅へ帰ることと、モロイが母親の所へ戻ることは、どこかで重なる部分があるように見える。そうすると、モロイは母親の所へ向かう途中どのように歩いたのか。

しかし、^{はこう}爬行の姿勢では止まることは直ちに休むことであり、しかもその姿勢自体が、他の姿勢と比べて、つまりひどく疲れさせる姿勢を言っているのだが、一種の休息なのである。そして、この方法で私はゆっくりと、だがかかなり規則的に森の中を進んだ。それほどへたばることもなく、一日に十五歩分は前進したのだ。¹²⁾

「一日に十五歩分は前進した」、これを聞いた者なら、話し手は冗談を言っているのではないかと半信半疑に陥るであろう。^{あり}蟻でもこれくらいの距離なら、十分に踏破すると思える道なりである。しかし、モロイにとっては決して冗談ではないだろうし、作者のベケットにとっても

戯画として読者の憐憫^{れんびん}を誘ったのではあるまい。一日に十五歩進むことは、健全な人間にとつてならあまりに容易な行動であろうが、足の不自由な人間にはこれだけの距離を進むのが精一杯の人もある。モロイがその人物であることは確かだ。彼は赤ん坊のように這って歩く。一般常識人なら、このけが人のそばには救助する人がいなくて、その時だけそうせざるを得なかったと判断するだろう。ところが、モロイはその日一日だけでなく、何日もその姿勢で前進を企てた。これをどう理解すればよいのか。常識外れの気まぐれと断じるのか。

モロイは放浪の精神を持っている。放浪者は彼が歩くのに目的地を定めない。彼が歩くのは、大地をさ迷うことによって彼の生きる価値を発見しようと努めているのである。何の為に生きているのか。生きることは人の役に立つ為にあるのか。生存は労働を代償としなければならないのか。生きるとは他人との調和のために、自己を犠牲にすることなのか。放浪者はこうしたことを明確な根拠もなく漠然と考えて、大地を歩き回る。彼が歩くのはどこかに行く為ではない。彼には自分の身を置く相応しい場所が見つからないのである。だから、彼は一箇所に留まるのではなく、場所を変えては、そのあるべき所にうまく達することを願う。彼は彷徨することを信条とするだろう。彷徨によって彼の精神が安らぐ地を見つけるまで、歩みを止めることはない。モロイは一日に十五歩分、歩いた。それで十分なのである。なぜなら、この十五歩分が彼にとっては思考の根底を支えているからだ。他人から見て、十五歩分が偉大であるか卑小であるかの問題ではない。モロイはこの十五歩において十分な「生息地」を得ているのであり、この歩行距離の中に放浪の魂が込められている。

人間が一日に蟻の進むほどにしか前進しないことに満足するとしても、それは狂気の故ではない。人間が亀のように這いつくばって歩くとしても、それは幼児の姿勢を思い出しているためではない。爬行の姿勢を取るのは勿論足に障害があるからに他ならないが、そこには放浪者が目指すところの原始の息吹^{いぶき}が漂っているのだ。それは人間がかつて持っていたであろう能力、四本の手足で自力により大地をしっかりとつかみ取りながら進むという能力を鼓舞するのである。彼は生命体として、大地に生きる意味を実感するであろう。爬行、それは目的地を必要としない放浪の魂の持ち主^{きずな}には決して無意味とは思えない、大地との絆となるべき行動なのである。モロイは自分の物語を書こうとして、過去の現象をこう断じる。

しかし、この私というか俺というか、この私の生存の断片的な物語をいくら続けても無駄である。というのも私の考えでは、それには意味がないからだ。¹³⁾

自分の名前を忘れてしまったモロイは、その忘却の代償として何か本質的なものを求めている。彼は探偵モランが捜査しようとして、ついに発見できなかった人物でもある。なぜ、モラ

ンはモロイを発見できなかったのか。モロイなら、ベケットの小説の第一部に最初から姿を現しているではないか。一体、母親に会いに来る前のモロイはどこに居たのか。モランはモロイを追跡する。しかし、発見できないのは、モロイの真の自己を追求しているからではないのか。真の自己は外見だけからでは見分けが付かない。モロイ自身が真の自己を見出そうとしている時に、他者がその人物を追いかけたところで、まるで影を捉えるようなものであろう。真の自己は本人にも隠蔽いんぺいされているのだから、他人から見て容易に発見することは不可能に近い。モロイ自身が自分の本質を探究しているとすれば、彼は現実世界に起こる現象の仮面をはずぎ取って、その奥に潜む真実を問うばかりであろう。

モロイは自分の過去に起こった出来事を捉えて、「生存の断片」 *cette tranche de mon existence* と認識する。一般的な人物なら恐らく過去の事実を一連の経験と見なして、そこに何らかの意味形成を行うであろう。それらの経験は今の自分にとっては有意義であったし、少なくとも人生の意味合いを強めてくれていると判断するであろう。ところが、自己の本質を求める人物にとってはどうか。過去の出来事は単なる現象に過ぎず、それは個々に分断された「断片」にしかならない。それをどう結びつけたところで、本質的な意味付けは形成されない。せいぜい人間の社会組織に従った表面的な価値付けが、作り上げられるだけである。自己の本質は、そうした社会性の中には存在しない。では、どこに本質なるものは見出されるのか。それは容易に発見されるものでは有り得ない。なぜなら、人間の本質とはその追求の困難さ、求めて求めきれぬ試練の中こそ姿を垣間見せるものだからである。モロイにとって、それは精神的な放浪として現れるのであろう、恐らく中世の騎士が行ったような、修行としての放浪の旅とは別の形として。

三、デュラス、『ラホールの副領事』

探偵モランは、かつて一度見かけたことのあるモロイという人物を追跡する。しかし、モロイを発見するどころか、モラン自身の方が森の中に迷い込んでしまい、冬の間、雪の中を放浪することになる。彼はあまりに長期間歩き続けたために、足を悪くして満足に歩行ができない。旅費も食料も尽きた状態で、彼は自然の中に自生する植物を動物のように口にす。一体なぜそれ程にまで、彼は困窮の身に陥ってしまうのか。彼は職業として探偵の仕事に就いているのに、前もって十分な調査費を支給されなかったのか。森の中で迷ったとはいえ、高山に登った訳ではないのだから、途中で誰かに出会い救助を求めることは出来なかったのか。そもそも彼がモロイを発見できず、事務所の連絡係であるガベルと直接出会って帰宅命令を受けたとき、なぜ一緒に帰ることが出来なかったのか。不可解な点はこの小説の中で幾つも見つか

る。モロイなら「状況や時間を混同」して平然としているであろうが、用意周到であるはずの探偵モランがこのような失態に及ぶとは、釈然としないところである。恐らく探偵モランがモロイを追求するうちに、空想の中で幻のモロイと自分が重なってしまったと考えるべきなのであろう。

ベケットの主人公は、マーフィーにしろ、ワットにしろ、マロウンにしろ、またエストラゴンとウラジミールにしろ、そしてベラックワにしろ、皆が放浪の魂を心に宿している。放浪は人間が人生の有り様を根本から考え直すのに、相応しい知恵をもたらすのである。人間の生き方を社会性をはぎ取ったところから捉えようとする作家がベケットであるとすれば、彼の同時代人で、同じく放浪を描いた作家にマルグリット・デュラスがいる。その作品は小説『ラホールの副領事』で、一九六五年の出版である。これはカルカッタに駐在する英国大使夫人のアンヌ＝マリー・ストレットルが、インドのレプラ（ハンセン病）患者や飢餓に苦しむ者の多さに驚きを覚え、その苦悩を心の奥深くに抱えるという話である。彼女はピアノもうまく弾きこなし、回りの男たちからも好意を持たれている。その男の一人にラホールという町に赴任している副領事のジャン・マルク・ド・Hがいるのだが、彼は内向的でインドの悲惨さに耐えられず、レプラ患者に向かって発砲するだけでなく、鏡の中の自分にもピストルを向けた。アンヌ＝マリーは彼の愛情を受け入れることはしない。彼女の悲しみは、インドの苦悩によって深く染められているのである。こうした時、一人の乞食女が彼女の前に現れる。この女は何者なのであろうか。レプラ患者に混じって生活しているというのに、彼女はその病気に感染しない。

乞食女の話は、小説中の人物であるピーター・モーガンという保険業をしている男が書いた小説の中で語られる。この女性は貧しいカンボジアの家庭に生まれた。彼女は妊娠すると、母親から追放されてしまい、二度と家へ戻ることを許されない。母親は娘に、「もし戻ってきたら、お前のご飯に毒を入れて、殺してやるからね¹⁴⁾」と宣告する。彼女は母親の言葉に従うしかなく、身ごもったままを出発する。最初のうちは故郷の村の近くをさまざまに迷っていただけであったが、程なく彼女は故郷を遠く離れることを決意する。なぜ妊娠したまま、食べる物もなく故郷を去らねばならないのか。子供の父親の分からないことが、それ程にも彼女の母親の怒りを買うのか。彼女は生まれ育った土地から遠ざかるしかない、彼女の^{うわさ}噂さえも伝わらないような遠くまで。彼女は放浪の旅に出る。生まれた子供は白人の女性に与えて、その後も独り身でさすらう。

彼女の追放は、モーガンの書いた小説の中で何を意味するのか。父親のいない子供を身ごもった罰を、単に表すためだけではあるまい。このカンボジアの女は乞食となって放浪の旅を続ける。普通の者であるなら、母親からある程度離れた自国の中で生活するだろう。しかも、生きてゆくためには、そこで仕事を見つけて新しい家庭を築くかもしれない。女性が放浪者と

して生きてゆくことは、男に比べはるかに困難を要する。何ゆえに彼女は、乞食の境遇に甘んじて生きるのか。モーガンは語るだろう、「彼女はもう決して働かないだろう。彼女の仕事は未知の何かだ¹⁵⁾」。未知の何かとは何か。それは実際に働くことになる仕事が、何かという意味ではない。仕事ではなく、何か別の目的があることを訴えている。

乞食女は十年掛かってカルカッタにたどり着いた。何のためにカンボジアからインドまでの遠距離を、放浪する必要があるのか。カンボジアもインドと同様、暖かい国である。気候のために十年間を歩き続ける必要はない。しかも、仕事をするよりも重要な何かがあると言う。一体、カルカッタには何があるというのだろうか。英国大使夫人のアンヌ＝マリーとその仲間の男たちは、カルカッタの近くにある島へ遊びに来ている。そこでマイケル・リチャードという彼女の恋人だった男が、女性の歌声を耳にする。それはどこかで聞いたことのある歌であり声であった。彼は思い出す、「あれはサバナケットの女だ。その通りだ、彼女はアンヌ＝マリーの後を付けてるみたいだ¹⁶⁾」。サバナケットとはカンボジアからインドへの途中にある町の名であり、そこで彼は乞食女の歌声を聞いていたのだ。なぜそこに居た女が今カルカッタに居るのだと不思議に思うのも束の間、彼はこの乞食女が、大使夫人のアンヌ＝マリーの後に付いて来ていることに思い至る。

アンヌ＝マリーはインドの惨状を憂いている。彼女はこの国人の苦悩を何とか和らげようとして、食事を分け与えたりしている。しかし、それだけの善意では、彼女の悲しみは消えない。彼女はこの国の苦しみを、自分が償う必要があると感じとっている。しかし、涙が湧き起こるだけで有効な手段は思いつかない。彼女自身が、インドの苦難を体験する必要があるのだ。自殺を企ててみたこともあるが、未遂に終わった。彼女の思いの中では、インドの人と同じ苦悩を味わうことが必要なのである。その思いの実像がサバナケットの女、つまりカンボジアの乞食女となって現れたのに違いない。最初モーガンの小説に語られていただけの乞食女が、まだ完結していないその小説から抜け出して、ついにカルカッタで現実の人間となった。それは悲しみの女アンヌ＝マリーの罪の意識が、化身となって現れたものである。その化身とは故郷を捨て、飢えに耐え、遠い距離を十年もかけて歩き通した乞食姿の放浪者であった。

放浪者、それは何を表しているのか。人間の罪の償いなのであろうか。裕福に暮らしている人間のかたわらには、食べる物もなく飢えに苦しみ、治らぬ病気の苦痛に耐え、雨露をしのぐだけの家をも持たない人がいる。こうした人々を間近に見た者は、どのように対処したら良いのか。一人か二人なら、自分の私財で助けてやることも出来る。しかし、何百、何千人といる苦難に見舞われた人々を、どうやって一個人が援助できるのか。アンヌ＝マリーはこうしたインドの惨状に心を痛めている。彼女の思いは、一人の見捨てられた放浪者を自分の中に見出すであろう、故郷を捨て、当てもなくさ迷い、食物もなく飢え、時に自然の草木や川魚を生食

し、着る服もなく、他人に物乞いをしてひざまずく哀れな放浪者を。この身代わりの人物はアンヌ＝マリーの苦悩と罪を、果たして償うことが出来るのであろうか。乞食女の姿は、単に彼女の悲しみを和らげただけの存在なのだろうか。

ベケットの小説『モロイ』においても、探偵モランがモロイなる人物を捜査のために追いかけている。モランは移動の手段としてモーターバイクがあるにも係わらず、人に気付かれないために徒歩で行動する。そして、余りに歩きすぎて足を痛め歩行困難となる。山小屋で火をたいて暖まっていたとき、一人の見知らぬ男が入ってきたために、彼は不審に思い殺害に及ぶ。モランが思い出すには、この男は自分と顔のよく似た男だった。一方、追われる身のモロイも一人の男を殺害する。彼も足を悪くして歩くのに不自由している。山小屋で休んでいたとき、炭焼きだという一人の男が入ってきて口論となったことから、松葉杖で頭を殴ってしまった。モランもモロイも、殺害の意志があって実行したのではない。それは人気のない山小屋のことであり、恐らく正当防衛であったのだろう。二人はそれぞれに殺人を犯した。しかし、小説作品の中では、この事件は両方とも単にその場限りの出来事として、その後の二人の行動に何ら影響を与えていないし、二人がこの件で悩むことも起こらない。

そうすると、モランとモロイ、歩行のままならぬ体で放浪する二人にとって、この放浪が彼らの殺人という罪を償うものであるとは考えにくい。彼らの足の障害は事件の前から起こっていたもので、殺人の罰として与えられた苦行ではない。しかも、特にモロイは自分の名前さえ忘れるほどに自己の固有性を失い、自分とは何者か、真の自己とは何かを追求する人物である。彼らにとって放浪とは、人間社会から離れ真実の自分を探し求める旅であった。一方、デュラスの『ラホールの副領事』において、乞食女の放浪がアンヌ＝マリーの無力感を償うことであるとすれば、この放浪もモロイと同様に、アンヌ＝マリーの真の自己を発見することであったと考えられる。彼女はインドの苦難を悲しみ、自分に出来る援助の手段はないかと日々憂いている。彼女は男たちに囲まれて愛の戯れに生きている自分を、表面的な仮の存在だと感じている。彼女の本当の姿はどこにあるのか。飢えやレプラの病に苦しむ人々と同様の苦悩を味わってこそ、真の人物になれると思うのであろう。そうした時、放浪する女性の姿が、身近にいる仲間によって小説の中に描き出された。そして、この小説が中断した後の乞食女は、アンヌ＝マリーのいるカルカタまで飢えに耐えてやって来ていた。アンヌ＝マリーにとってこの放浪する女性の姿こそ、彼女の無為を償う真実の人物となったのである。

四、放浪とアイデンティティ

放浪は人の自己形成に指針を与える。なぜなら、それは人が現在生きているところの社会性

を脱ぎ捨てて、原始の野生に戻る事だからである。野生においては人は社会の慣習や規則に拘束されなくて、自分の自由意志に従って行動を起こす。これによって人に何か不都合な事が起ころうが、それは本人の責任において問われる。日々の食料も自分で確保することになる。盗賊やどう猛な動物に襲われないよう、自らの住居を見張る必要がある。放浪者は恐らく、自分が誰であるかなどということは考えないであろう。他の人間が回りに居ないのだから、自分が誰であろうと気にかけることはない。だから、放浪者が自己形成を行うとはいうものの、完全な野生状態の中ではその必要性は生じない。確たる自己が必要なのは、すでに人間社会の中で生存し、これに不遇を感じている者である。人間社会においてこそ野生の意味が問われるのであり、放浪の有り様もただ単に群れを離れた一匹狼というだけでは不十分であろう。

自己の起源、それは放浪の中にある。放浪は既存の社会によってすでに規定された自己を破壊し、新たな無垢の自己を形成しようとする時に大いに手助けとなる。ところが、自己というもの、社会的自己であろうが野性的自己であろうが、自己というものをそもそも必要としない人間がいる。他に誰も人のいない野生の状態であれば、人間は人間であることを意識する必要がなく、馬であろうが猿であろうが、他の動物と共存することに満足しているであろう。人は自分というものを規定する必要があるだろうか。多数の人間に囲まれて生活している時にこそ、人は自分が他人とどう違うか考えてみなければならない。自分がどのような人間であるかという問題は、自分が人生において何を行いたいのかという職業選択と結びついている。収入と結びついた職業でなくとも、人間は何か人生に目的の持てるようなことをしないと無気力に陥り、憂鬱おろの檻に閉じ込められる。何か自分の気質に合ったことを行うためには、自分の性格を知り、能力を確かめ、気力の充実を図らねばならない。己とは何者であるか、それは人の行う職業や行為、ものの考え方によって計られるであろう。そして、放浪することは、これらの行動の原点に立ち返ることである。放浪は真に人が成りたいと思うことを示唆する。しかし、人生において何もしたくなく、何にも成りたくない人がいたとしたら、どう対処すべきか。

真のベラックワというものは存在しないし、またそのような人物など実際にはいないことが望ましい。確実に言えることは、彼自身の判断によると、無関心と怠惰と無私無欲のぬかるみの中で、彼自身と隣人のアイデンティティから解放されることの方が、他の唯一の選択肢である放浪という哀れな大失敗よりも、彼の呪われた気質には相応しいということだけである。¹⁷⁾

ベラックワとは、『並には勝る女たちの夢』というベケットの初期の作品に登場する主人公である。この小説は一九三二年に書かれたのだが、物語の飛躍が大胆すぎるために出版社は見

つからず、一九九二年になってようやく刊行されることとなった。しかし、この作品にはベケットの原型となるものが豊富に盛り込まれていて、この小説家の魅力を発散し続けている。その魅力の原動力となっているものが、主人公ベラックワなる存在である。この人物はダンテの『神曲』の「煉獄篇」に登場するが、余りに怠け者であり、その改悛^{かいしゆん}を拒んだため、煉獄前域で生前と同じだけの期間、待ち続けなければならない罰を与えられる。この怠惰を本領とする人物を、ベケットは同名のまま彼の小説に描いた。

「真のベラックワというものは存在しない」。この人物はまるで天の邪鬼^{じやく}ではないかと、この文を読んだ者なら思うであろう。ここまで見てきたように人間であるなら、真の自己を追求することに情熱を燃やす。モロイは真実の自己を探し求めて、悪い足を引きずりながら放浪を続けた。マーフィーもワットもマロウンも、彼らが放浪へと駆り立てられるのは、自分が真実と思える世界で生きるためであった。ところが、ベラックワは真の自己を敢然と否定してみせる。なぜ彼は真の自己を必要としないのか。それは彼自身が言うように、「無関心と怠惰と無私無欲」の中で生きる為であるのか。他人や社会の出来事に無関心である人間は、自分のことに関しても執着心を持つとしない。それはちょうど自分の近辺に人間が居住せず、動物ばかりの原始社会に生きる者が、人間としての自我意識など問題とすることも無いのと同様であろう。周りの人間に無頓着であれば、彼は原始社会に生存しているのと同じ環境に居ることになる。自分の思った通りに行動を起こすだけで、それに対し法に違反するとか、慣習から逸脱するというように非難されることはない。彼は思い通りに生活するだろうし、この自由が何の支障も来さないのなら、彼の自由は自由であることを問題にするまでもなく守られている。だから、社会に無関心である人間は真の自己を問う必要などなく、必要なのはただ一つ、現実自分が生きていけるかどうかだけである。

社会の慣習に従わないで生存が可能かどうか。社会生活の中で一番重要なのは、働いて収入を得ることである。働かずして生きていける資産家もいるだろうが、例えば土地をすでに所有している者であるなら、農耕により自給自足が可能であるかもしれない。しかしながら、この自給自足に金銭取引が介入しないとしても、自分の労力を費やして働いていることに変わりがない。まして他人に雇用されている者であれば、時間に拘束され労働規則に従わねばならない。個人経営であるとしても良質品を要求され、商業であれば売上げの確保を迫られる。だから、社会に対し無関心を装うとしても、労働により収入を得ようとする以上、人の自我意識は社会の中に組み込まれている。社会を無視するためには、人は働いてはならない、または自分の好む時だけ気ままに働けばよい。

労働を拒否すること、人の役に立つことを嫌うこと、これは怠惰な人間にとっての条件である。怠惰な人間は、何か有意義なことをすることに耐えられない。しかし、怠惰であることを

信条とする人間は、何のために怠惰であろうとするのか。もし怠惰によって何か有意義なことがもたらされるなら、それは怠惰では有り得ないことになる。ベラックワは怠惰であることが、「彼自身と隣人のアイデンティティから解放されること」であると言う。自分のアイデンティティから自由になることが、有意義なことであるかどうかの判断は難しい。大半の人間が、確固とした自己を所有することを渴望している。ベケットの主人公モロイも、真の自己を求めて森を放浪した。そうした時、自分のアイデンティティから解放されることは、価値あることなのかどうか。恐らく自己からの解放はそれを願う人間にとっては有意義なことであろうし、自己の喪失は人間の条件を多少なりとも超越するのであろう。なぜなら、自己を失うことによって彼は何のために生きているのか、その意味さえも失うであろうから。自己意識から解放された者は、人生を考える能力も失うことになる。思考を放棄すれば、その者は動物と同程度の精神力しか持たないことになる。彼は生きる目的を忘失して、野の草を食べ餌食えじきとなる動物を追いかけるのみであろう。

自分のアイデンティティから解放される、それは一時の願望としては成立する。ベラックワ自身もこれが想像上の理想であると考えている。一時的なことであれば、人は自分自身を失っても良いとは思うであろう。なぜなら、一時的に自己を失うことは仮定上のことであって、時間がたてばまた元の自己に復帰できるからである。苦悩する自己があるとき、この自己を解放してやれば、それに付随していた苦悩も消失すると考えるのが人間というものであろう。これなら、自己からの解放を誰もが願うことになる。ところが、長期に渡り自己を失うことは、自分の存在がなくなることに等しい。まるでダンテの『神曲』のベラックワが両手で膝を抱え、そこに顔をうつむけていたように、未来が見つからないのである。アイデンティティから解放されることを希求する人間は、もしこれが実現したとして、その後は何をするというのであろうか。働くことを極度に嫌ったマーフィーは、精神の暗黒世界に置かれた状態を「原子」に例える。

ここでは、彼は自由ではなかった。絶対的自由の暗黒の中の一原子にすぎなかった。

ここでは動けなかった。彼はさまざまな行き交いの、絶え間ない無秩序な発生と崩壊の中での一点にすぎなかった。¹⁸⁾

マーフィーは、彼の想像で描く暗黒層が「絶対的自由」の世界だと言う。しかし、その暗黒の世界に置かれた彼は、なぜか「自由ではなかった」と打ち明ける。なぜ自由世界にいながら、自由であることが拒絶されるのか。それは、彼が生命体として保持しなければならない自己の魂を失っているからである。余りに自由でありすぎる世界においては「無秩序」が支配し

ていて、そこに人間のアイデンティティを確立することは難しい。そこでは人間は肉体と精神を持った生命体である前に、物質の基礎となる無機質の「原子」の状態に還元されてしまうのであろう。原子となった人間に、もはや自由を望むことは不可能である。原子とは単なる物質であって、人間の意志も魂も持ち得ない砂のような粒子に他ならない。だから、マーフィーは彼が世界の第三の層と呼ぶこの暗黒界に彼の至福を求めることは出来ず、彼の精神的平和を第二の層である「薄闇」の世界において実感することになるのである。自分の「アイデンティティから解放される」ことは、時に生命体以前の「原子」になることを意味する。精神界で原子になってしまった人間は自由どころか、何ものも必要とせず、また何者でもない存在として、そこに放置されているに過ぎないのであろう。

自分のアイデンティティから解放される、これが一時的な瞑想の中でのことなら有意義であろう。社会の抑圧の中にあって、苦悩する自己から逃避したいとは誰もが念ずるところであり、想像の世界でこれを実現することは、その者に新生の喜びをもたらす。ところが、この想像上の解放は長続きしない。ベケットの小説『名づけえぬもの』（一九五三年）の語り手は、自分が一体誰であるのか突き詰めようとする。自分の名前をバジル、マフード、ワームというように別名で呼んで真の自己を捉えようとするが、どれも核心に迫るほどの真実性を持たない。更にベケットが書いた小説の主人公マーフィー、モロイ、マロウンの名を挙げて自己の本質に近づこうとするが、どれもこの語り手を満足させるに至らない。自己からの解放がなぜ叶わないのか。ベラックワのように空想の世界で、一時的な逃避を小説の語り手は試みている。彼は確かに精神的に自分のアイデンティティを崩壊させて、他者に変身しようとしている。ところが、この変身が一つの自己に集約しないのである。一時的な気休めに自己の変容を行うのであれば、彼にも開放感が生まれるであろうが、彼は自己追求を完全に納得のいくまで止めようとししない。

肝心なことは俺がどこにも到着しないということ、俺が決してどこにも居ないということ、マフードのところにも、ワームのところにも、俺自身のところにも居ないということだ、いかなる神の思し召しかは知ったことじゃない。¹⁹⁾

語り手は自身の変容を試みるが、他者の中に真実の自己を発見することは出来ないし、自分自身にも見出すことは叶わない。では、どうしたら良いのか。自分のアイデンティティを放棄するのみで、それに代わる自己を追求しなければ良いわけだが、それも実行できない。なぜなら、アイデンティティを放棄したと思っても、肉体の方が残っている。アイデンティティのない肉体、これが長期間にわたって存続可能だろうか。まるで人形のような、精神を持たない物

体に変容するのみである。短期間であるならベラックワが考えたように、空想の世界でアイデンティティから解放されることも可能だろう。しかし、空想の時間は終わりを迎える。アイデンティティを持たない肉体は原子と同様、精神を欠いた操り人形にしか過ぎない。肉体を失って死の世界に入ってしまったら、どうだろう。それも可能かもしれない、多くの宗教家が死の世界の永遠性を説くように。しかし、『名づけえぬもの』の語り手が、今さら死の世界を信じるのが可能なのか。『ゴドーを待ちながら』の死を待ちわびているエストラゴンは、「俺は一生、自分をキリストとおなじように考えてきたき²⁰⁾」と言うけれど。

『名づけえぬもの』の語り手は、自分のアイデンティティから解放されることを切望している。それは単に他人に変身することでもなければ、死の世界を選ぶことでもない。彼はどのようにしたら自己を捨象できるのか。語り手はついにこのような考えに到達する。「俺のいる場所には俺しかいないんだ、存在しない俺しか²¹⁾」。アイデンティティからの解放を願っている人物は、彼の精神性を放棄しようとしているのだから、もはや実在しないも同様である。それは人間としての魂を見捨てているのだから、物体としての人形にしか過ぎない。だから、精神性を欠いた人間はこの世に存在し得ないことになる。しかし、肉体だけはこの「俺」という形で残されている。肉体だけあって精神性のない生き物、これが「存在しない俺」 moi qui ne suis pas という形態であるのだろう。この有り様において、『名づけえぬもの』の語り手は自己の超越に到ったのだろうか。精神をどこかへ放出してしまった以上、その人物はその場所には居ない。しかし、その精神性の放棄が真の人格を生み出していないのであれば、「存在しない俺」とは単に抜け殻としての存在でしかないだろう。ベケットにおいて、自己の昇華は困難な結末へと向かう。

ジャン＝ポール・サルトルは一九四三年に刊行された哲学書『存在と無』の中で、自己の有り様について述べている。

意識は、それが出現するやいなや、反省の単なる無化的運動によって人格的となる。なぜなら、一つの存在に人格的な存在を付与するのは、一つの「自我」……これは人格の記号でしかない……の所有ではなくて、自己への現前として、対自的に存在するという事実であるからだ。²²⁾

人間に人格を与えるのは、サルトルによれば、「自己への現前として対自的に存在する」ことだと言う。人間は生まれながらに持っている資質だけで留まっていたら、その人格は向上しない。人間が世界の中で新しい価値を創造できるとすれば、それは回りの状況に対して積極的に関与していくという意識の働きかけこそが重要であって、このことをサルトルは「対自存

在」と呼んでいる。現在の自己に対し超克を企てようとする人間の意識の働きは、たとえ世界の有り様を否定するものであるとしても、人間の自由の保証として欠かせないものとなる。ところがベケットの場合、自分のアイデンティティを解放しようとする試みは、彼の意識によってなされている訳であるが、この試みは『名づけえぬもの』の語り手にかえって苦渋を強いている。自己からの解放は新しい真の自己を生み出すことが出来ず、否定された現在の自己はますますゼロの存在へ、無の状況へと追い込まれていくばかりである。新しいアイデンティティが確保されないと人間意志が芽生えない以上、その者は怠惰であることの希望を打ち消されて、無気力の憂鬱へと墜落していくであろう。「存在しない俺しかない」と言うとき、彼のアイデンティティは解放どころか、新しい自己を迎えることが出来なくて、精神的な空白の中に置かれることになる。人間の形骸だけがあって、アイデンティティを形成する精神的自己は、消滅の危機に立たされているのである。

人間は自分のアイデンティティを必要とする。しかしながら、既存の社会の中で育成された自己は、その者に生きる喜びをもたらさない。彼は自分を新しい自己に作りかえようと念願するであろう。どのようにしたら真の自己は生み出せるのか。現在の自己を放棄して新しいアイデンティティを獲得すること、恐らく空想の中でなら、自由に人格を入れ替えることが可能であろう。そこでは人は王子になることも可能だし、乞食になることも自由自在である。昼間は善良の士で、暗くなれば夜盗となる。空想の中でなら、アイデンティティを入れ替えることは容易そのものである。しかし、空想は一時の戯れに終わるし、また場合によっては際限なく付きま^{おんりよう}とて怨霊と化す。真の自己を生み出すには、どうすれば良いのか。モロイは、「自分が誰であるか忘れ、他人みたいに自分の前を歩き回することは、私にはよく起こることだ²³⁾」と言う。彼は真の自分が誰であるかを知るために、足を悪くして這いずり回りながらも放浪の旅を敢行する。放浪によって、過去の偽善に満ちた自己は再生されるであろうか。それはベケットの主人公にも知り得ぬ人生の謎である。真の自己とは過去に生きていた人間社会に再度復帰することにあるのではなく、放浪の予見を許さぬ混沌と不安の中に秘められているものであろう。

注

- 1) サミュエル・ベケット、『ワット』、Samuel Beckett, *Watt*, Les Éditions de Minuit, 1968, pp. 254-255
- 2) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 27
- 3) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 152
- 4) 前掲書、p. 209
- 5) 前掲書、pp. 172-173

- 6) 前掲書、p. 211
- 7) 前掲書、p. 256
- 8) 前掲書、p. 170
- 9) 前掲書、p. 73
- 10) 前掲書、pp. 18-19
- 11) 前掲書、p. 37
- 12) 前掲書、p. 138
- 13) 前掲書、p. 84
- 14) マルグリット・デュラス、『ラホールの副領事』、Marguerite Duras, *Le Vice-consul*, *Œuvres complètes II*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2011, p. 545
- 15) 前掲書、p. 569
- 16) 前掲書、p. 651
- 17) 『並には勝る女たちの夢』、Beckett, *Dream of Fair to middling Women*, Arcade Publishing, 1992, p. 121
- 18) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 100
- 19) 『名づけえぬもの』、Beckett, *L'Innommable*, Les Éditions de Minuit, 1953, p. 87
- 20) 『ゴドーを待ちながら』、Beckett, *En attendant Godot*, Les Éditions de Minuit, 1952, p. 73
- 21) 『名づけえぬもの』、Beckett, *L'Innommable*, p. 114
- 22) ジャン=ポール=サルトル、『存在と無』、Jean-Paul Sartre, *L'Être et le néant, Essai d'ontologie phénoménologique*, Gallimard, 1948, p. 148
- 23) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, p. 62